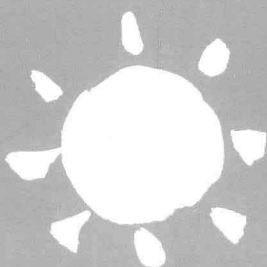


日本作文の会編

日本の 子どもの詩

長崎





日本作文の会編

日本の
子どもの詩

長崎

岩崎書店

日本の子どもの詩 42 長崎

一九八四年三月一〇日 初版発行

編者 日本作文の会

発行者 大川松利

印刷所 株式会社 K・M・S

株式会社 金羊社

製本所 小高製本工業株式会社

発行所 岩崎書店

東京都文京区水道一―九―二
電話(〇三)八二二・九一三二(代)

はじめに

各都道府県別につくられた四十七冊のこの本ゼンたいには、一九一八年「赤い鳥」が創刊されてからあとの六〇年間に、つくられた、日本の子どもたちの詩のおもなものが、年代順にならべてあります。

これらの詩は、そのときどきによって、児童自由詩、童詩、児童詩、児童生活詩、生活童詩、生活綴方の詩などともよばれ、世界にもまねなものとあります。

これらは、ねっしんな先生たちによる創造的な教育のいとなみとしてうまれたものですが、日本の子ども自身がつくரிだした芸術（現代の子どもの「わらべうた」）としても、大きな意味があります。

わたくしたちは、このことを頭において、念入りにこの本をつくりました。

この一冊は、そのうちの「長崎編」であります。どうぞ、ひとつひとつといねいにお読みください。

もくじ



1918
~
1945

13	12	11	10	9	8
銭	天主堂	卵うり	川も	弟	いもづらかえし
					月夜
					貧乏
					川原で
					夕方
					夏空
					可愛い鳩
					おひる
					昼頃
					からす
					父の頭
					きょうかいどう
					げた

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
稲刈	兵隊を送る	あんち	雪の朝	牛のはみ	野ヤキ	ハッパ	桜の花	馬	父の網仕事	ペンキ屋	工場
											機械
											とび
											おむかえ
											霧
											夕日
											音をきく
											ローラ運転
											新しい船
											海にもぐる
											雪の朝
											荒狂う海
											麦の芽
											ヒコウキ
											姉ちゃん

26

白い牛

1945
~
1959

28

こいのぼり
びょういん

マンガ

29

星

じょう気の力

30

先生は軽いぞ

牛だし

「原ばくの子」を見て

31

母がわりの姉

戦争

32

やまのぼり

どろんさま

子もり

33

夜

弟との話しあい

34

おとうさんと

雨ふり

あらしの夜

36

はじめてきた脱穀機
曾根の赤だけ

37

風呂たき

三角屋根

38

夜の山

つるしがき

めのはとり

39

こおろぎ

あさがお

40

ほあんたいの家

おかね

41

山のぼり

死にたくない

浜辺

42

誘蛾燈

はちの巣と親たち

43

かぜ

44

だいくさん

じてんしゃ

ふとか

45

つしま

におい

買物

46

石材工場

とうしゃばん

ぼくの手

47

えんぴつ

雲仙の霧氷

48



1960
～
1969

- 59 かあちゃんね顔
戦争
58 へいざん
すずめのす
やぎ
57 せんせい
おかあさん
56 せんせい
先生へ
55 回想
原子雲のかけら
54 テロの国といわれたくない
落ち葉
53 働く人
かき
52 おとうさん
炭鉱
51 とんぼ
おくんち
50 けいとう
おとうさん

- 72 田んぼ
伊王島
60 おかあさんなぜ私をうんだの
61 吉井に
62 せんせい
63 うし
64 オリンピック
せんせいのげんこつ
65 おとうさんのけが
66 炭坑で働く父
67 造船所の男たち
つまずく
68 祖母へ
おとうさん
69 おとうさんの手
犬
70 おとうさん
先生の横顔
71 冬のおとずれ
わた雪
72 子どもが
別れる真鍋君へ
佐藤総理大臣へ



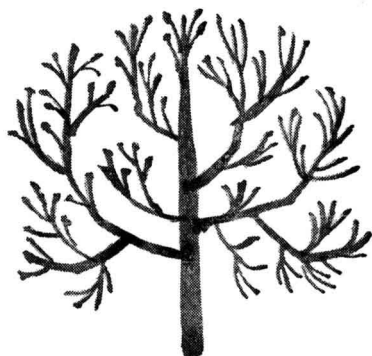
74

ブルトーザ

102	101	100	99	98	97	96
お母さんになっ たらこう言おう	うんがついて いないなあ お手玉	平和 通知表	にじ	お母さん ひねくれ おかあさんの たんじょう日	あさがい 子牛のたん生	けしごむ 秋の終わり

110	107		106	105	104	103
この本の編集 をした人たち	あとがき—— 長崎県の児童 詩指導の歩み	*	冬の海	夜明け 母の背	何のために 生きる みさえ	兄 あきかん





1918 ~ 1945
(大正7年) (昭和20年)

ここには、
長崎県の子どもたちが
詩を書きはじめたころの作品と
その後、
生活をしっかり見つめて
すぐれた詩を書くようになった
戦前の詩が、
年代をおって出ている。

げた

古川清雄 小1

げたが、一匹、二匹、三匹、
雨にベチャベチャぬれている。

佐世保市光月校

きょうかいどう

本多ふさ子 小2

きょうかいどうの、やねに、
からすが、二ひき。
ざぼんの、えだに
さんのみが、七つ。

女子師範付属校

父の頭

柴田謙吉 高2

密柑畑みかんにいと汽車が通った、
大勢おおぜいの学生がのっていた、

8

汽車は笑い声のこしていった。

おいちも修学旅行にゆきたいな。

枯木かれきがもえる煙けむりの中に父の頭、

お母さんにわかれた父、

おいちは父の頭見い見い泣いた。

長崎市勝山高木校

からす

久保ちや 小4

いねを刈かったあとの、
ひろいひろい田のまん中に、
まっくらなからすが
たった一人でいます。
夕日に光ったはねげが、
冷たい風に、
はらはらとおどります。

南高来郡神代校



昼頃 ひるころ

目白 めじろ とつて いる 時、

日の 光が

椿 つばき の 葉 に あ た っ た。

お 昼 頃 だ。

山田恒夫 高2

対島豊校

おひる

諸石好生 小3

お 日 さ ま ば か ば か

え ん が わ で

か わ い い ね こ が

あ く び し た

佐世保市琴平校

9

可 愛 い い 鳩 かわいいはと

あ の 鳩 は

い つ も 飛 ん で 行 く。

食 べ 物 を さ が し に 行 く の だ ろ う。

あ の 愛 ら し い 鳩 は

い つ も い つ も 食 べ 物 を さ が し て い る。

あ の 愛 ら し い 鳩 が

岩崎喜太郎 小6

北松浦郡歌浦校

夏空

福田祐一郎 小6

つ り 糸 た れ て

じ っ と 見 つ め て い る と、

水 面 に う つ る 雲 の 峰 みね が、

ウ キ を す い 込 み そ う だ。

東彼杵郡竹松校

夕方

野中 栄高³

戸口の灯がちらりと見えた。
たて糸のもつれを解く祖母の姿も
ちらりと見えた。

暗い牛小屋で牛の腹帯を解いていると、

かべのすきからもれる

八日月の淡い光が

もう小屋の中に照っている。

鞍を下された牛が

大きな安堵の息をした。

夕食の匂いが

いそがしく流れた。

北松浦郡上志佐校(指導)近藤益雄

10

川原で

松本トシ高¹

読方の解積ができないといってしかられ、

川のひろい石にもたれて

読方のことを思う。

川の水は

何もしらない。

泡が消え消え流れている。

私の重い心は流れない。

北松浦郡上志佐校(指導)近藤益雄

貧乏

久保川 豊小⁴

父と米売りに行った。

米がやすいから、

父はやっぱりがっかりした顔だ。

この金では税金は納められない。

近ぺんの金持から、

借^(かり)って納めねばならない。

どうしても父はがっかりしたようだ。

貧乏はかない。

家の人数が多いからだ。

夕日が強く、

障子^{しょうじ}をとおすのを見て、

僕はやっぱり思っている。

北松浦郡上志佐校(指導)近藤益雄

月夜

久住呂孝一 小4

月が前の家を照らす。

ふろ小屋の煙が、かるく立つ。

僕は猫と月を見た。

猫は、手をなめる、

僕は、だまって月を見ている。

猫のなめた手がぬれていて、

しずかな月夜だ。

北松浦郡小値賀校

いもづらかえし

田口米八 小4

ばばさんと いもづらをかえす

もう昼^{ひる}であろう

自動車が

下の道を通っていく

わきの草は ほこりだらけ

僕の頭から

あせがおちてくる

こやしたごに

日がてりつけている

北松浦郡小値賀校(指導)近藤益雄

弟

上島伴九郎 小5

いろりのはたで

弟が

つよいといばった

おしころがしたらすぐないた

西彼杵郡矢上校

川も

三浦守正 小4

川もの 白い花

さいている

時々

こつこつと

鮎ふながつつく

柳の葉が

池になびいて

しずかな昼ひる

北松浦郡小値賀校

卵たまごうり

小田ツギヨ 小5

私が陣じんとりをしていると

かあさんがよびにきた。

何かあるばいと思って

かあさんについて戸口にはいると

かあさんはすまんような顔で

「卵たまごを売りいってこんか。」といわれた。

私は、「あい」と、いって笑った。

ざるの中に、十三個の卵たまごを入れて

町の方へ出た。

「こうてくれまっせ。こうてくれまっせ。」

と、私わたしはおらまけび廻まわった。

ああだれも買うてくれんやった。

みんなけいべつしたような顔で、卵たまごを見た。

松ヶ枝町の曲り角にくると

奥様が、いくらね、といわれた。

ああうれしやと思ひ、三銭といったら、

四つおくれといわれた。

私は四つ紙に包んでさし上げた。

「卵たまご、卵たまご」と、ふれ声をたてて

また町中をおらまけんで廻まわった。

もう日がくれかかって、

足もとがとぼとぼした。

さわやまの別荘のわきにきたとき

なんばんひいらぎの花が

ぷうんと匂^{にお}って来た。

なんばんひいらぎの花はいい匂いと思った。

ざるの中の卵を見ると

卵は

まっ白い色をしていた。

長崎市南大浦校(指導)松本滝朗

天主堂

朝の六時頃

南山手に使いにいった。

天主堂の前はおそろしい。

アングエルの鐘が鳴ると

天主堂はぐらぐらゆれるように見えるから、

おそろしい。

ぼくはおそろしいから歌をうたって通った。

通りすぎろうとすると

むにやむにやと蜂^{はち}がうなるようだ。

裏口のすきまからみると

関直人 小6

白い信者が見えた。

はあ、おきようあげているのかとわかった。

あたりを見ると、ぼうつとして

鬼ゆりの花が咲いていた。

長崎市南大浦校(指導)松本滝朗

銭^{ぜに}

学校へおはらいするお金を

お母さんから十銭もらった。

そのお金を置き忘れて

びっくりして家へかえった。

お母さんにいうと

お母さんの顔がけんのようにとがり

いきなり私を打たれた。

私はよろよろして

上り口の柱につかまった。

「命からがらになって働らんば、

十銭はとれんとばい」

と、お母さんの声が

蔵田友子 小6

私にさささつてきた。

私は泣かずに、神さまに祈った。

書方の時間だった。

私が紙入れから、敷紙を出そうとしたとき、
チリと音がした。

びっくり下を見ると

十銭玉が夢のように、ゆかに光っていた。

長崎市南大浦校(指導)松本滝朗

姉ちゃん

光田アサ子 小5

博多から、姉ちゃんは

げいしやになって帰って来た。

げいしやのことを色々話してきかせた。

げいしやは、つらいつらいことだと話した。

姉ちゃんは、また行くといわれた。

父さんとうちと、てい車場で送った。

姉ちゃんが汽車に乗って

ピィピィが鳴ったから

ああ、別れかと思った。

14

姉ちゃんの目から涙が落ちた。

父ちゃんの目から涙が落ちた。

うちの目からも涙が落ちた。

汽車は、ぽうぽうと行ってしまったが
父ちゃんも、うちも、足がうごけなかった。

ふといふといたためいきが出てきた。

長崎市南大浦校(指導)松本滝朗

ヒコウキ

フジアヤコ 小1

ヒコウキガ、

シロイ ヒヨリニ

タカイ ソラヲ トンデユク。

北松浦郡小値賀校(指導)鬼塚あつ

麦の芽

桃田興四郎 高1

この間まいた麦が

芽を出しはじめた。